2024年度　第55回「博報賞」応募書類

受付No.

作成日2024年6月7日

【活動領域選択】

	国語教育		日本文化 ・ ふるさと共創教育
	日本語教育		国際文化 ・ 多文化共生教育
	特別支援教育	◎	独創性と先駆性を兼ね備えた教育活動

【候補者】

(団体) ・ 個人

団体名もしくは個人氏名

フリガナ　アキタケンダイセンシリツオオマガリミナミチュウガッコウ
秋田県大仙市立大曲南中学校

【推薦者】

氏名	フリガナ イトウ　マサミ 伊藤　雅己	役職名	教育長
所属先	フリガナ ダイセンシキョウイクイインカイ 大仙市教育委員会		
所属先住所	フリガナ　アキタケンダイセンシオオマガリカミサカエチョウ2-16 〒　014-8601　秋田　都 道 府(県)　大仙　(市) 区 町 村 大曲上栄町2-16　（建物名）		
電話	（直通）　0187-63-1111（330）	（緊急連絡先・携帯）	0187-63-1111（330）
メールアドレス（PC）　kyouiku-sou@city.daisen.lg.jp			

【連絡窓口 ・ 事務手続き担当者】

氏名	フリガナ ササキ　ヤスヒロ 佐々木　泰宏	所属部署・課	教育指導課
		役職名	次長兼課長
所属先	大仙市教育委員会		
郵便物送付先	フリガナ　アキタケンダイセンシオオマガリカミサカエチョウ2-16 〒　014-8601　秋田　都 道 府(県)　大仙　(市) 区 町 村 大曲上栄町2-16　（建物名）		
電話	（直通）　0187-63-1111（335）	（緊急連絡先・携帯）	0187-63-1111（335）
メールアドレス（PC）　kyouiku-gak@city.daisen.lg.jp			

受付No.

【推薦理由】

大仙市立大曲南中学校（以下当該校）は、2006年からエネルギー環境教育に取り組み始めた。2008年から2013年までは、文部科学省「新しい環境教育の在り方に関する調査研究事業」及び「環境教育に関する取組を活用した調査研究事業」の指定を受け、環境教育を教育課程に位置付けるとともに、ESDの視点でカリキュラムを開発し、学校全体で取り組んできた。2013年には、全国小中学校環境教育研究大会を当市及び当該校を会場に開催した。その取組をさらに深化させ市内の小・中学校に広めるため、大仙市教育委員会では、2014年に「環境教育研究指定校」として支援した。当該校は、毎年行われる大仙市教職員研究集会において、教員が取組を発信したり、その集会の中で生徒が登壇して市内の教員を対象に環境についてのワークショップを行ったりした。当該校は、当時から市内の小・中学校の環境教育をリードしてきた学校でもある。

また、2016年、2017年には、国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業（ESD）の指定を受け、ESDカレンダーに基づき、食育、エネルギー教育、国際理解教育を3本柱とした教科横断的な学びの取組を全国に向けて発信した。さらに、2015年に国連によりSDGsが決議され、社会に浸透し始めた2019年からは、「教育からSDGs達成に迫る」ことを合い言葉に「ESD　for　SDGs」を掲げ、ESDの取組をさらに深化させた。特に、当該校が2023年に開発した「ESDストーリーマップ」は、全国のESD実践校から注目されている。当該校がSDGsに積極的に取り組んだことが市内の中学校にも大きな影響を与え、2022年には各中学校の代表生徒で組織する「大仙市中学生サミット」において、全市の中学校を挙げてSDGsに取り組むことを決議した。本市は「SDGs未来都市」に指定されているが、当該校が学校ばかりではなく、市全体としてのSDGsの達成に貢献していることは明白であり、市民も認めるところである。

当該校のこれまでの取組は、学習指導要領前文に明記された「持続可能な社会の創り手の育成」と方向を一にするものであり、教育全体及び学校経営の在り方をリードするものであると確信している。また、このような取組により生徒自身が自分の成長を感じていることが確実な成果を挙げていることを表している。今後の取組計画も、これまでの取組を土台としながら、さらに多様なステークホルダーと連携しネットワークを広げるなど、大きな教育効果があるものと思われる。当該校がこれまで積み上げてきたESDのノウハウは、全国の小・中学校への波及効果も大いに期待できるものである。

以上の理由により、大仙市教育委員会教育長として「第55回博報賞」に推薦するものである。

作成者
（PC入力可）　役職　教育長　　お名前　伊藤　雅己

【候補者様の博報賞応募歴】 有　・　(無)

【推薦者様向けアンケート】

博報賞をお知りになられたきっかけを教えてください。 該当する項目に〇をつけてください。 複数回答可

	当財団から郵送された案内	（お届け先 ：　　）
	新聞	（新聞名 ：　　）
	教育専門誌	（雑誌名 ：　　）
	学会 ・ 研究会　刊行物	（会の名称 ：　　）
〇	紹介 ・ 口コミ	（候補者様より ・ 過去博報賞受賞者様より　　） （推薦者様より ・ 同僚より ・ 知人より ・ 紹介者様名 ：　　）
	インターネット検索	（検索ワード ：　　）
	情報 ・ ポータルサイト	（閲覧場所 ：　　）
	当財団ホームページ ・ Facebook ・ SNS	
	当財団メールマガジン	
	財団員による直接訪問	
	その他	（　　）

団体用

受付No.

【候補者 ・ 活動の概要】

団体名	フリガナ アキタケンダイセンシリツオオマガリミナミチュウガッコウ 秋田県大仙市立大曲南中学校
活動タイトル（35文字以内）	ストーリーとネットワークで紡ぐ「ESD　for　SDGs」

団体の情報	フリガナ　アキタケンダイセンシフジキアザカミノナカ70-2			
	〒　014-1412	秋田　都道府(県)		大仙(市)区町村
	藤木字上野中70-2	（建物名）		
	電話（代表）	0187-65-2001	FAX	0187-65-2051
代表者	フリガナ　シマダ　サトル		役職名	コウチョウ
	氏名	島田　智		校長
	電話（直通）	0187-65-2001	（緊急連絡先 ・ 携帯）	090-1499-2823
	メールアドレス（PC）	satoru-shimada@edu.city.daisen.akita.jp		
連絡担当者	フリガナ　シマダ　サトル		役職名	コウチョウ
	氏名	島田　智		校長
	電話（直通）	0187-65-2001	（緊急連絡先 ・ 携帯）	090-1499-2823
	メールアドレス（PC）	satoru-shimada@edu.city.daisen.akita.jp		

◆団体設立の趣旨（学校は記入不要です）

〈活動に関して〉

◆活動開始時期　（西暦）　2006年　4月頃　（活動開始から19年以上経過）

◆活動の規模

- 参加している子どもの人数 ： 全体　年間70～120名 （内訳）　中学生相当　年間70～120名
- 指導者数 ： 内部　年間20名、 外部　年間15名
- 協力者（ボランティア等）：年間20名
- 開催ペースやクラス数（定期的に開催している活動のみ）：ESDカレンダー、ESDストーリーマップにより教育課程に位置付けて、全校または学年ごとに実施している。現在の学級数は6。

◆活動歴・研究歴

- 2008～2009年　文部科学省「新しい環境教育の在り方に関する調査研究事業」
- 2010～2013年　文部科学省「環境教育に関する取組を活用した調査研究事業」
- 2013年　全国小中学校環境教育研究大会秋田大会開催
- 2016～2017年　国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業（ESD）

◆受賞歴（博報賞含む。統廃合前の受賞歴もあれば、分かる範囲でご記入ください。）

- 2011年　地球温暖化防止活動環境大臣賞（環境教育・普及啓発部門）
- 2023年　第23回環境美化教育優良校等表彰事業　文部科学大臣賞
- 2024年　文部科学大臣優秀教職員表彰「社会に開かれた教育実践奨励賞（教職員組織）」
- 2024年　第14回ESD大賞「ESD優秀賞」

【活動の目的・実践内容・成果】

受付No.

〈活動のきっかけと目的〉

2005年から2014年までの10年間を「国連持続可能な開発のための教育の10年」とすることが決議されたことを受け、校内では、これまで本校で行われてきたキャリア教育や体験活動を生かしつつ学校教育からESDに迫るにはどうすればよいかという議論が始まったことが活動のきっかけである。その後、2015年にSDGsの概念が出され、学習指導要領にも「持続可能な社会の創り手の育成」が明記されたことから、本校の目指す方向も明確になり、10年後、20年後の持続可能な社会をつくる人材を育成することを目的として、当事者意識をもたせるためのストーリー性を重視した学びを、外部人材を大いに活用して行うこととした。

〈具体的な実践内容〉

本校では、これまでの実践を踏まえ、2021年から「持続可能な社会の創り手となるための資質・能力」の育成をめざし、教育目標として「自律　貢献　創造」を掲げている。その具現化のための手段として、ホールスクールアプローチでESDに取り組み、総合的な学習の時間を軸とし各教科等との連携を図った教科横断的なカリキュラムを構築している。本校のESDの柱は、「食育」「エネルギー教育」「国際理解教育」であるが、SDGs17の目標相互とのつながりも踏まえてカリキュラムを設定し、体験を通して「社会的実践力」を育むことで、「生きる力」の育成に資することを目指している。本校では、ESDを推進するためには、「子どもの学びの『ストーリー』」をつくることが重要であると考え、3年間のつながりを踏まえて、子ども自身の「ストーリー」を、当事者意識をもって展開できるように支援してきた。また、「教育は学校内で完結することは不可能である」という共通認識の下、外部機関との連携が極めて重要であると考え、NPO法人や企業等との「ネットワーク」を構築して実践してきた。これらをベースとして、教育活動全体をESDの視点で捉え、「人」「教材」「能力・態度」のつながりを踏まえた探究的な学びを展開している。

次は、令和5年度の実践である。

①1年生のプログラム

1年生の前半は「食」でストーリーを展開した。給食由来の肥料を用いて、JAの指導を仰ぎながらの野菜栽培。その後、大曲農業高等学校博士号教員による有機肥料の出前授業。さらに、栽培した野菜を使っての省エネクッキング。そして、一連の学習を通して見出した「食品ロス問題」を課題とし、フードバンクやスーパーを訪問するなどして、「食」に関する課題探究を進めた。後半は、住居についてのプログラムを実施した。ストーリーは「『過去』→『現在』→『未来』」の時系列の展開である。初めは、家庭科の住居の学習で、国登録有形文化財「旧本郷家住宅」を訪れ、地元の一級建築士の解説のもと、昔と今の家をエネルギーの視点で比較した（過去の家）。次に、積水ハウスの出前講座「いえコロジーセミナー」で、今の家の断熱について実験を通して学んだ（現在の家）。最後に、再び一級建築士の指導で「未来のエコハウスを設計しよう」という課題に取り組んだ（未来の家）。生徒は、住居を通して多角的にSDGsを学び、2年生のストーリーにつなげた。学習のまとめとして、「2050年の社会と私たちのくらしアイデア募集（日本環境教育学会）」に全員が応募し、優秀賞に1点と、佳作に2点入賞した。

②2年生のプログラム

2年生は「エネルギー」でストーリーを展開した。洋上風力発電の会社「オーステッド・ジャパン」による、洋上風力発電のVR体験をした後、秋田市にある実際の風力・太陽光発電所等の再生可能エネルギー施設を見学した。その後、東北電力による発電の出前授業や、産業技術総合研究所研究員による燃料電池の授業等のエネルギーに関する講座に参加した。加えて、未来のためのESDデザイン研究所から講師を招いて「気候変動ミステリー授業」に取り組んだ。さらには、修学旅行でオーステッド・ジャパン社を訪問し、自分たちが学習したことをプレゼンするとともに、洋上風力発電を詳しく学んだ。最後は、前年から連携している一級建築士の指導で、前年実施の「エコハウスを設計しよう」からつながる「エコシティーを設計しよう」という授業でまとめ、SDGs17の目標のつながりや達成の意義を自分事として捉えた。

②3年生のプログラム

3年生は「国際理解」でストーリーを展開した。初めに、国際教養大学の留学生と、海外のSDGsへの取組や人々の考え方について意見交流を行った。次に、日本キリバス協会のケンタロ・オノ氏をファシリテーターとして、キリバスの中学生とのオンライン交流を行った。気候変動の影響をいち早く受け、国土が海中に沈んでしまうという深刻な状況であるキリバスの同年代の子どもたちとの交流を通して、気候変動をより切実に感じ、自分たちは何ができるのかを考え提案した。さらに、修学旅行では、オーステッド・ジャパンの本社がある環境先進国のデンマーク大使館を訪問し、自分たちの取組をプレゼンするとともに、デンマークの環境対策について学んだ。このような学びを通して、「『誰一人取り残さない』未来、世界の人たちが幸せになれる未来を目指したい。」と強く思うとともに、グローバルな視点で世界の出来事を捉え、当事者意識をもってSDGsの達成に向けて行動しようとする意識を高めた。3年間の学びを3年生有志がまとめ、「2050年の社会と私たちのくらしアイデア募集（日本環境教育学会）」に応募し、最優秀賞を受賞した。

令和6年度は、2年生のプログラムを、より気候変動に焦点化して実施する。修学旅行では、一般社団法人炭素回収技術研究機構（CRRA)の訪問を計画している。また3年生で、地域の商店や企業と連携したSDGsを踏まえた商品開発に国際教養大学の学生のコーディネートで取り組み、「AIUマルシェ」で販売することを計画している。これら全ての取組は、ESDストーリーマップに位置付けられており、各教科等や外部リソースとのつながりを踏まえたストーリーを展開できるようにしている。

〈活動による成果〉 次の1～3の設問について、それぞれご記入ください。

受付No.

1. 活動を通して、または終えての成果、子どもたち一人ひとりにどのような変容や成長が見られたか

本校ではESDの目標を、「E：教育」と「SD：持続可能な開発」に分けて設定している。「E：教育」の目標では、「学習で身に付けたい力」として「①批判的に考える力、②コミュニケーションを行う力、③多面的・総合的に考える力、④進んで課題を見つける力、⑤学んだことを発信する力、⑥生活に活用する力」の6項目を設定し、生徒や教員のアンケートから評価を行っている。また、「SD：持続可能な開発」の目標では「持続可能な開発について考え実践する力」として「①SDGsに関する知識・技能、②SDGsに向かう意欲、③課題解決方法の考察、④行動変容・実践力」の4項目を設定し、生徒の振り返りの文章や普段の行動観察から評価を行っている。その結果、令和5年度は、「学習で身に付けたい力」は、6つの力全てについて、4点満点中3.2点を超えるなど、高いレベルで身に付いているということが分かった。また、「持続可能な開発について考え実践する力」については、例としてキリバス交流を終えた後の振り返りの文章を取り上げると「気候変動の問題は大きすぎて、子どもの私たちにできることは少ないです。でも、年齢や地位、人種、言葉の壁を壊してしまえば、たくさんの知恵が1つになって解決の道へとつながっていきます。そうすれば、国や島、生き物だけでなく、地球や『未来』まで救えるのです。そういうことを世界に広める人間として生きていきたいです。」「私たちが平等に、平和に活躍できる笑顔あふれる未来を創るのは私たち自身です。周囲の人たちだけではなく、世界に発信することの素晴らしさを学ぶことができました。これから一緒に世界中のみんなが幸せになれる未来を創りましょう。」等と記すなど、学習を通して、「世界」を意識するようになっているとともに、当事者意識が芽生えている。「持続可能な開発について考え実践する力」の「①SDGsに関する知識・技能」はもとより、「②SDGsに向かう意欲」、「③課題解決方法の考察」、「④行動変容・実践力」についても十分身に付いたと言えるのではないかと思われる。

3年間を通した学びのストーリーによって、本校が目指す最上位目標である「持続可能な社会の創り手となるための資質・能力」が十分身に付いたと思われる。ただし、これで終わりではなく、これからも当事者意識をもって学び続け、主体的に活動することで、10年後、20年後に真の「持続可能な社会の創り手」となることを望んでいる。

2. 活動が周囲に与えている影響・効果

本校の取組は、決して学校だけでできるものではない。様々なネットワークでつながった、地域の「人、もの、こと」であったり、専門家であったりと、外部から大きな影響を受けている。反対に、本校と連携している方々の話を聞くと、「自分たちも中学生から教えられることが多い。」と話してくれる。今後も、外部講師等とwin−winの関係を継続したい。

本校の取組は、家庭にも大きな影響を与えている。生徒が学校で学んだことを家に持ち帰って家族に報告し、家族全員でSDGsの達成に向けた行動を起こすことも少なくない。PTA講演会等で直接保護者が学ぶ機会もあるが、多くは生徒を経由して学んだ知識や意識であり、子どもに促されて子どもと共に行動するようになるなど、家族を巻き込んだ行動化につながっている。

本校の取組は、地域にも大きな影響を与えている。本校取組を積極的にメディアに取り上げてもらうことで、アルミ缶回収等の地域を巻き込んだ活動に、積極的に協力してくれる方々が多くなった。特に、ABS秋田放送で本校の生徒が出演したスポットCM「SDGsきいてみた」は、大きな反響を得た。

さらに、SDGs未来都市である大仙市も、本校の取組に注目している。大仙市長は「中学生からSDGsを発信することで、市民の意識を変えてほしい。」と本校にメッセージをくださった。大仙市内10校の中学校の代表で組織する「大仙市中学生サミット」の主要共通実践項目は「SDGs」である。本校は中学生サミットの中でもSDGsをリードしている。

今年度、さらに地域とのつながりを密なものにするため、地域の力を活用したSDGs商品の開発と販売に、次世代ユネスコ国内委員の学生やキャリア教育コーディネーターの力を借りて取り組む。3年間SDGsを学んだ3年生が、その知識や技能、実践力を生かすとともに、地域の素材や技術を生かした商品開発をすることで、地域活性化にも寄与できるものと思われる。

3. 他の教育現場で応用し、活かせるポイント

多くの学校でSDGsを意識した活動に取り組んでいる。しかし、「活動レベル」の取組が多いのが現実ではないだろうか。したがって、時間の制約等もあり、活動することが目的になってしまったり、単発の活動になってしまったりすることが多い。学校において持続可能な社会の創り手を育成するためには、「活動レベル」から「学習レベル」に引き上げることが必須であると考える。そこで重要になるのが、カリキュラム・マネジメントである。カリキュラム・マネジメントを行う際に留意することは、教育の内容を教科横断的な視点をもって組み立てていくことと、学びのストーリーを作ることである。本校で作成しているESDカレンダー及びESDストーリーマップは、カリキュラム・マネジメントを見える化したものであり、「教材のつながり」「能力・態度のつながり」「人のつながり」が一目で分かるようになっている。作成にあたっては、全教職員が関わっているため、共有や共通理解も容易である。本校では教育目標の具現化のためにESDを実践し、その核となるのが総合的な学習の時間であるという方向性で教育活動を進めている。他校においても教育目標の具現化のために何を軸として、どのような方向性で進めるのかを分かりやすく表現するために、本校のESDカレンダー及びESDストーリーマップは参考になるものと思われる。

また、本校は多くの外部リソースとの連携・協働を行っている。その「つながり方」のノウハウは、他校においても応用できるものであると考える。地域とのつながりは十分できている学校も多いと思うが、企業やNPO法人、大学等とのつながりとなると、高い壁を意識してしまうのが現状である。本校で行っている出前授業を他校でも実施したり、合同で実施したりするなど、学校間や教職員間の横のつながりを活用して、本校の「つながり方」を多くの学校に広めていきたい。さらには、HPや各種メディアを通じて本校の取組を発信することで、社会に開かれた教育課程の実現にも貢献したい。

受付No.

●添付資料（郵送分）の返却　どちらかに〇をつけてください。　希望しない　・　する
●添付資料（6点まで）　※「応募要項」の「8.応募について◆提出物③」をよくご覧いただきご準備ください。 （例）子どもの成果物、活動内容をまとめたリーフレット、活動写真アルバムなど ・ 学校教育に関わる活動の場合 ： 年間指導計画や教育課程への位置づけが分かる資料の添付もお願いします。 ・ 学校以外の団体の場合 ： ①組織概要（リーフレットなど）、 ②直近1～2年分の収支が分かる資料もご提出ください。 添付資料には1点ずつすべてに「候補者名（団体名・個人名）」「資料No.（番号）」をご明記ください。
No1. ESDカレンダー（令和5年度版）1年～3年
No2. ESDストーリーマップ（令和5年度版）1年～3年
No3. 大曲南中ESD【学習で身に付けたい力】教室掲示ポスター
No4. 「E：教育」（学習で身に付けたい力）の評価（令和5年度）
No5. 「SD：持続可能な開発」（持続可能な開発について考え実践する力）の評価（令和5年度）
No6. 東北エネルギー懇談会会報「ひろば」（冊子）
●その他　参照すべきホームページ、 刊行物、制作物、 主要著書（タイトル・発行年）、 論文などあれば、ご明記ください。 大曲南中学校ホームページ　http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~om-minamityu/

【候補者様向けアンケート】
博報賞をお知りになられたきっかけを教えてください。該当する項目に〇をつけてください。複数回答可

○	当財団から郵送された案内 （お届け先 ：大仙市立大曲南中学校）
	新聞　（新聞名 ： ）
	教育専門誌　（雑誌名 ： ）
	学会 ・ 研究会　刊行物　（会の名称 ： ）
	紹介 ・ 口コミ　（推薦者様より ・ 過去博報賞受賞者様より ・ 知人より ・ 紹介者様名 ： ）
	インターネット検索　（検索ワード ： ）
	情報 ・ ポータルサイト　（閲覧場所 ： ）
	当財団ホームページ ・ Facebook ・ SNS
	当財団メールマガジン
	再チャレンジ
	その他 （ ）

◆3ページ目以降を作成いただいた方

役職　校　長　　名　前　島田　智

以上、 6ページ目で最後となります。 ご記入ありがとうございました。